IS ～二人目の男～

ハタハタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～二人目の男～

【Ｎコード】
Ｎ５３１７Ｑ

【作者名】
ハタハタ

【あらすじ】
インフィニット・ストラトスの二次創作で、男オリ主です。
駄文ですが、精一杯書こうと思っているので、よろしくお願いします。

一話

?目を覚ますと暗い暗い牢屋の中だった。まあ自分のしたことを考えると仕方ないのかもしれないが。

?俺は死刑になって殺されるだろう。それもまたーー面白い。

?世界は死に溢れている。そうは思わないか?ならそれを楽しむのは悪いことなのか?

?死は平等で儚くーー綺麗だ。俺は病んでいるのかもしれない、それとも俺以外の人間が病んでるのか?どちらにせよ、世界では俺が悪なのだ。

?このまま自分で死んでしまうのもいいかもしれない。最後の殺しーー自殺。ああ、今まで何人も殺してきた俺だが、自分という特別な物を殺したことはない。他人に殺されてしまうのならいっそ……

ーー死ぬな。

?不意に、奴の言葉が思い出される。……そうだ、俺はまだ死んではいけないんだ。思い出した。俺が初めて人を殺めた日のことを、理由を。

?こんな場所にいてはいけない。殺される。ふと、自分が恐怖を感じていることに気が付く。

「あは、あはははははははは」

?笑う。先程までは自ずから死のうとすら考えていたのに、奴のことを思い出すと恐怖を感じている。それは、約束がとても大事なのかーー奴が大事なのか。

?そんなことなどどうだっていい。俺は生きる。そして、奴と再開する。

「結局別れるまで解りあえなかった俺等だが、次に会うときは認めさせてやる。プリンの素晴らしさを」

?こうしてはいられない。一刻もやはくここから抜け出さないと……。しかし、両腕は鎖で縛られ、力を入れられないようにされている。足も鎖で束ねられている。

?考えろ、今までそうやって生きてきたじゃないか。思考を加速させていく。……が、突然扉が開く音がしてそれは遮られる。

「気分はどうだね。最強の殺人鬼」

「そう呼んでるのはお前等だけだろ。俺の仕事名はルークだ。それくらい覚えとけ」

「ならルーク、朗報だ。お前を牢から出すこととなった。条件付きではあるがね」

?これは渡りに船だ。どんなに危険な条件でも、今の俺は助かる方を選ぶ。

「一つ問う、何故女の方が強いのに男の俺に頼む?」

?男は鼻で笑った。

「それをお前が言うか。裏でコソコソＩＳを使っていたくせに」
「バレてんのか……」
?そう、俺は女しか使えないはずのＩＳを使用することが出来る。しかし、それが公になってしまったら俺は殺しが出来なくなってしまうから、人前であまり使わなかったのだ。
「それは、もう全世界に知らせたのか？」
「無論。しかし、案ずることはない。お前のことが発表される前に、男で初めてＩＳに乗れた少年が現れたよ」
?それでもあまり変わらないじゃないか。というか、各国が本気で探りを入れたら俺が殺人鬼であることがバレるんじゃないのか？
「ああ、その心配はない。世界で二番目にＩＳに乗れる男だ。日本政府も大切な二番目の情報を既に改竄しているよ」
?俺の表情を読んだのか、男がそう答える。
「で、期間はどれくらいだ？」
「なに、対象が公立ＩＳ学園を卒業するまでだ。君ののしてきたことを考えると短いだろ？ちなみに断れば、必要な時以外はここで過ごしてもらうことになる」
?ここにいたら、体を弄くられるかもな……。なんたって、世界で二人しかいない男のＩＳ操者だ。
「わかった。仕事を引き受けよう」
「やはり、こんな良い話は断らなかったようだな。そうそう、君はルークと名乗っていたようだけど、発表したのは戸籍で登録されて

いる名前だ。だから、ルークではなく国谷　琉偉、と名乗るように」

?男は俺の拘束を全て解き、自由にした。二日ぶりの自由はとても気持ちよかった。

「それじゃあ、行こうか。早く用意しないと入学式に遅れるしな」

?……ちょっと待て、もしかして俺も入学するのか！？

?これはマズイ、学園なんて人間の多い場所に行くと殺人衝動が抑えられない。そうなれば、護衛どころじゃなくなってまたここに帰ってくることになる。

「俺は入学しないからな！」

「なら、ずっとここに居るか？」

?ギロリと擬音が聞こえそうな程、キツく睨まれる。

「お前は殺人衝動が抑えられなくなる、なんて考えているのかもしれんが、それを抑えるのも罰の内だ。それにー対策はしてある」

?ほら、と言われて差し出されたサプリメントを受け取る。凄い量だ。

「これは気分を落ち着かせる薬だ。これさえ飲めば大抵の欲など抑えることができる」

?殺人鬼が殺人を止めたら、ただの鬼じゃねぇか。でも、まあそれもいいか。死と同様に面白くて綺麗な物も存在しているかもしれない。それに、あの時の……ダメだ。考えるな、考えたら弱くなる。

「ほら、これも持っておけ」

?:そう言って手渡されたのは、馴染みのあるイヤリング。

?:俺のＩＳーーいや、相棒といった方が正しいな。

?:また一緒に戦えるとは思っていなかったが、これからもよろしく頼む。俺のエクストリーム・マーダラー

二話

?:俺は、エクストリーム・マーダラーの超近接武器を展開し、試験官と対峙していた。

「では、始め！」

?:俺の武器はナイフ。武器の長さは一メートルもないが、この形態は速さに特化し、さらにナイフの刃には特殊な機能がついているので大丈夫だ。

?:対して、試験官は銃器で対応してくる。俺は銃なんて興味無いので、詳しくはないが懐に入れば銃はただの塊になることはわかる。まあ、その前に俺のＩＳの速度に着いて来れてかつ、発射する時間があればの話になるのだが……どうかな？

「行きます！」

「二日振りの戦いだ……少しは抵抗してくれよ……ククッ」

?:笑が零れる。俺が勝つのは当たり前だが、いったいどんな戦いをするのか、どう俺を驚かせてくれるのか？

?:試験官は、身の丈よりも遥かに大きい銃器を構え、俺に放つ。

?:キュインッ！独特の音が鳴り響く。

?:チッ、戦闘は静かにやるか、盛大にするかのどちらかにしろ！

「試験官、よ〜〜く聞け！俺は中途半端な攻撃が一番嫌いだ！」

?その言葉を吐いた後、俺は初めて仕掛けた。それも、直進して横腹を傷つけるだけの単純な攻撃なのだが……

?しかし、周りから見たら、俺が試験官の前から背後へ瞬間移動したように見えただろう。それほど速かった。

?ドサリ、と音がした後、試験官は倒れた。彼女の腹からは血が流れ出ている。

?ギャラリーは、唖然としている。それもそうだ。ＩＳには絶対防御が備わっているはずなのに、それが作用していないのだから。

「なあ、このまま放置しといていいのか？まあ、すぐには死なないが、早く手当てするに越したことは無いぞ」

?俺はＩＳを待機状態に戻して、固まっているギャラリーに声をかけた。

「ほ、保健室！取り敢えず、保健室に運びましょう！」

?ギャラリーは一斉に正気を取り戻し、試験官を運んで行く。

「なんでこうも慌てるかな……？」

「あまり慣れていないからだろう。そもそも、ＩＳでの模擬戦はシールドエネルギーを０にすることで決まる。つまり、怪我をすること自体が稀なのだ。それに、ギャラリーはお前の攻撃で頭が一杯になっていたから、余計にな」

?俺の独り言に、例の男が答えた。

「そうかもな。ま、シールドなんかに頼ってる方が悪いんだよ」
「ハハハハ、ＩＳのシールドをそんな風に言えるのはお前だけだろうな」
?そうかもしれない。しかし、そんなことはどうでもいいんだ。重要なのは、勝つか負けるか、生きるか死ぬか、だ。

三話

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよ！」

?そう言っているのは副担任の山田真耶だ。制服を着ていたら、生徒でも通じる、といった容姿をしている。先生というには、少し幼い。

?はぁ、と溜息を一つ付く。護衛するのは、八城　麻衣だ。彼女の父親は、自分の娘がＩＳ操者になることに反対したのだが、愛する娘がどうしても、とせがむので俺に依頼したらしい。

?ちなみに、娘が命の彼は世の中の大半の情報を掌握しているらしい。……これは、一級の機密事項なのだが。

?麻衣は俺が護衛していることを知らない。そして、俺は極力それを知られてはならない。ちなみに、護衛といっても後遺症の残らない程度の怪我なら助けなくてもいいらしい。また、例外としてＩＳが使えなくなるが、日常生活に支障が出ない怪我なら許容されている。……むしろ、将来戦場に立つくらいなら、そういう攻撃は見逃してもよい。

「げえっ、関羽！？」

?その言葉の後に、パアンッ！っという気持ちの良い音が教室中に響く。

?俺は叩かれている者を見た。ーー織斑一夏だ。

?今度は叩いた者を見る。心臓が高鳴った。ヤバいーー奴だ。

?俺は、殺気をダダ漏れにして、奴を睨む。もちろん、口元は緩み

きっているし、頭はあの時のことばかり考えている。

?奴がこちらを見た。高まっている鼓動が、さらに強く、深くなる。

「そこのお前、そうその嫌らしい殺気を漏らしているお前だ。私になにかようか?ようがないのなら、その殺気を収めて欲しいんだが……無駄そうだな」

「わかってるじゃねぇか。織斑　千冬だっけ?俺と勝負しろ」

?

?教室がシンとしている。それはそうだろう、最強の千冬に男で二番目にＩＳに乗った新参者が挑戦するのだ。

「はぁ、少し灸を据えてやろう。少し思い上がった生徒を躾けるのも教師の役だ」

「アハ、アハハハハハ。お前こそ、負けて吠え面かくなよ。それと、二年前のようにはいかないと知れ!」

?千冬は、二年前のあの熱い戦いを思い出せないらしく、腕を組んで目を閉じている。

「二年前……いや、記憶にないが?」

「これでどうだ?」

?俺は制服の内側に入れていた仮面を取り出す。真っ赤な鬼の仮面。禍々しい、血のような赤の鬼だ。

「さあ、そんなもの一々憶えてはいられない。お前の思い違いではないか?」

「だったら、今度こそその体に刻み付けてやるよ。ククッ、そうだＩＳなんて不粋な物なんか使わずにな!」

？ハァ……ハァ……ハァ……ハァ……ハァ……。もう我慢できねぇ、コイツハオレガコロス。

？コロス

「そろそろ止めておけ。このクラス全員が怯えている」

？ヤメル？ナニヲイッテルンダコイツハ……マダオレハナニモコロシテナイシマンゾクモシテナイ

「それに、そんな状態で戦って意味があるのか？」

？……ソウダ。ソうだ。そうだ。俺はちゃんとこいつと戦う。そして、勝利する。あの状態の俺では満足できない。

？一粒、鎮静剤を飲む。……ふぅ、落ち着いた。

「失礼したなぁ、織斑先生。でも、あの時のことを憶えてないなんて、俺はショックだったぜ。あんなに激しかったのにな……」

？俺はここで爆弾を落とさせてもらう。思春期の少年少女に、激しい、はよく勘違いしてくれるいい言葉だ。

「「「「エエエエエェェェェ！！！！」」」」

？ほら、釣れた。よし、もう俺はしらん。鎮火は織斑先生に任せよう。

?しばらく、教室は騒然としたが、十分後にはすでに静り、平常通りに戻っていた。……まあ、頭を押さえているのは除いて、だか。

＊＊＊＊＊

?一時間目が終わったあと、俺は近くの生徒と話していた。きちんとさっきのこと一連が全部冗談だと認識してくれたようで、少々声が上ずりつつも普通に接してくれた。

?俺は殺しは好きだが、生きている人間とコミュニケーションをとるのも普通に好きだ。なので、わざわざ嫌われるような行動はしない。

?あっ、一夏が困ってる。……助けてやるか。

「おーい、一夏。同じ男同士、似たような心境だろ?ちょっと、話さないか?」

?突然話しかけられて、一夏は驚いたようだ。ひょっとすると、さっきのこともあるかもしれない。

「えーっと……」

「ああ、俺は国谷　琉偉だ。ルイでいいぜ。よろしく」

「ああ、よろしく。そういえば、ルイの演技、凄かったな。本当に殺そうとしてるみたいだったぜ?」

?俺は曖昧に笑っておく。まあ、一夏とは何かと長く付き合いそうだから、もしかすると俺の殺人衝動とかがバレるかもしれないし。

?:さて、そこの話したくてウズウズしてる女の子に振るか。

「篠ノ之　箒さん？だっけ、何かさっきから一夏と話したそうにしてるけど、どうしたんだ？」

?:箒は、さっきから一夏のことを睨んでいたのだ。というか一夏よ、自分が睨まれていることぐらい気付け……

「ほらほら、何か理由があったから睨んでたんだろ？早く言っちゃえよ。これから一年は嫌でも過ごすんだぜ？仲良く行こうぜ！」

?:俺が箒の背中を叩くと、箒は顔を赤らめて走って行ってしまった。

「どうしたんだろ？」

「さあ？俺と箒が幼馴染ってことが原因かな？」

?:間違いなくそれです、一夏さん……

?:本当に、しっかりしてくれよ。お前は世界で初めてＩＳを起動させたって設定の男だろ？これからはお前が中心になっていくのに……

「そろそろ次の授業だし、席に着いとくわ。じゃあ、後でまた話そうぜ」

「ああ、男はお前しかいないんだし、頼らせてもらう」

「任せとけ！」

?:力強く、頷いてやる。一夏の頑張りしだいで、俺の負担が減るんだしな。

?:さて、教科書でも出しておきますか……

三話（後書き）

亀更新ですが、よろしくお願いします。あと感想、アドバイスなどがあれば遠慮せずに書いて下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5317q/

IS 〜二人目の男〜

2011年1月31日04時32分発行